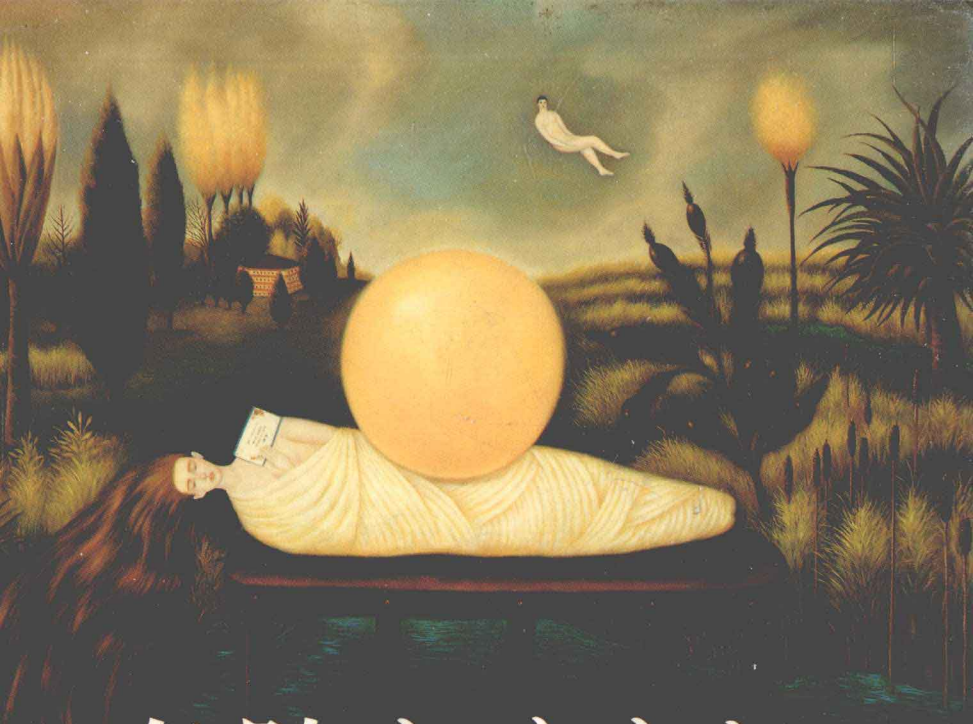




危険なあなた

Yoko YAMAZAKI

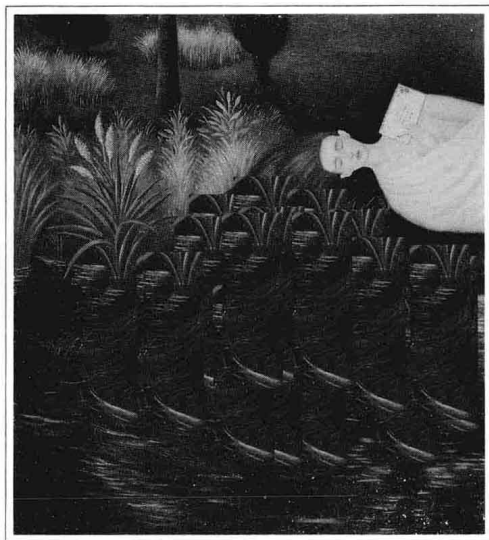
YOKO YAMAZAKI

山崎洋子

危険なあなた

YOKO YAMAZAKI

山崎洋子



危険なあなた

一九八九年七月一〇日 初版印刷
一九八九年七月二〇日 初版発行

著者 山崎洋子

発行者 嶋中鵬二

印刷所 図書印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八-七
振替 東京二二三四

©1989 Printed in Japan

ISBN4-12-001837-7

目次

あじさい色のレディ

5

曼珠沙華の夜

63

ボニーに首ったけ

109

騒々しい悪魔

163

あなたのいない夜

213

装幀
落田
洋子

危険な
あなた

あじさい色のレディ

——まるで外国だわ。

重い足どりで歩きながら、西原栄子はおどおどと眼を伏せた。

すれ違う人々は、若く美しく、明かりに映えるショーウィンドーは、春の色に満ちている。

通じない言葉、聴いたことのない音楽、雑誌の中でしか見たことのないファッションが、栄子を萎縮させていた。

午後八時半の六本木——もう何年ぶりだろう。最後に都会の夜を見てから、十年以上たっているような気がする。

栄子は三十五歳だった。平凡なOLを経て二十四歳で結婚した。独身時代から地味なほうだったが、それでもあの頃は、同僚のOLたちと夜の街をそぞろ歩いたものだ。

誘われて、スナックやパブへ行ったこともある。

けれども、結婚後はまるでそんな機会がない。三回ほど移り住んだアパートも、二年前にやっとロインで購入したマンションも、都心から二時間近く離れている。

昼はろくに陽も射さず、夜は隣に気兼ねしてみんなが息をひそめているような狭苦しい環境で、栄子は日々を重ねてきた。

都会のさんざめきが栄子には辛かった。特に今夜は――。

みんなにあのことを言えばよかった。そうすれば、あれほどみじめな気持になることもなかったのに。

交差点で立ち止まり、ショッキング・ピンクに彩られた『アモンド』という喫茶店をぼんやりと見上げながら、栄子は爪を噛んだ。

田所千鶴の夫は売れっ子のデザイナー、下村早紀子は自分で喫茶店を開いたし、森川順子は息子が有名中学に合格したという。下田弓子は、大企業の部長というキャリアウーマンだ。

高校時代の仲良し五人が三年ぶりに集まったというのに、自慢するものが何もなくしたのは栄子一人だ。

四人が我れがちにと喋り、笑い合うなかで、栄子は笑顔を作り相槌をうつのに苦労した。

値段の安さだけで買ったマンションや、小さな車体整備工場の工員である夫のことなど、華やかそうな友人たちに話せるものではない。

まして、成績の悪い、いじめられっ子の子供のことや、毎日の、うんざりするほど退屈でつましい生活のことなど――。

でもたったひとつだけ、栄子もみんなを驚かせることのできる話題を持っていた。いや、四人の友人たちだけではない。これを言えば世間もアッと驚くに違いない。

週刊誌やテレビが駆けつけ、栄子は一躍時の人になれるだろう。

なのに、そのことを言わなかった。ひとかけらの良識と、いまひとつ確証がないために。

「あッ」

栄子は息を吞んで立ち止まった。

眼の前にあの人がいる！

いや、実物ではない。それはあの人の写真だった。

止めていた息を吐き、栄子は改めて驚いた。

六本木の交差点をいつ渡ったのだろう。いま立っているところは、アクターズ・シアターという劇場の前だった。

足がこの場所へと、勝手に動いたらしい。

そういえば、八時に渋谷でみんなと別れ、ふらふらとひとり六本木などへ来たのも無意識のうちだった。

あの人がアクターズ・シアターで演^やっていることは、前からわかっていた。もしかすると、渋谷で高校の頃の仲良したちと会うことが決まった瞬間から、もう気持はここへ向いていたのかもしれない。アクターズ・シアターは、日本の俳優集団のエリートともいうべき演夢座の、常設劇場だ。

現在の演^たし物は、栄子でさえ名前を知っている売れっ子劇作家の新作だった。あの人——風戸栄介は、その主役をつとめている。

老結婚詐欺師に扮した風戸が、ボスターの中から微笑みかけていた。広い額に垂れた柔らかそうな銀髪、やさしくからかっているような眼、高いノーブルな鼻、暖かく知的な唇、そして、豊かな人間的性を感じさせこそすれ、少しも老けた印象など与えない眼尻の皺。

もはや六十歳だというのに、風戸栄介は完璧にセクシーだった。日本の役者にしては珍しく、上品な軽さがある。

演夢座の大幹部ではあるが、時々テレビのスペシャルドラマにも出演し、中年女性には圧倒的な人氣があった。昨年などは、『主婦の夢見る不倫相手』ナンバーワンに選ばれている。

チケットの窓口はもう閉まっていた。

「一枚ください」

雑誌を読んでいるもぎり嬢にむかって、栄子は言った。

「え？ いまから入るんですか」

驚いた顔で相手が答える。

「ええ、いけないんですか」

「そうじゃないんですけど、九時までなんですよ。もうすぐ終わるんです」

もぎり嬢は壁の時計を振り向いた。九時までにあと十五分しかない。

「いいんです。わたし、風戸の知り合いですから、ちょっとでも観ておきたいの」

自分でも驚くような言葉が、スラリと口から出た。と同時に、妙な度胸が栄子の内に生まれた。

「チケット、売って下さるんでしょ」

栄子は少し強い口調でもう一度言った。

もぎり嬢はあいまいな表情で切符窓口を開け、チケットを一枚差し出した。

客席は八分の入りだった。これは商業演劇として成功しているほうだ、と栄子は判断し、風戸のためにホッと安心した。

後のほうで、栄子は立ったまま舞台を見た。

風戸栄介が、若い女優を抱きしめて愛を囁いている。

結婚詐欺師とその被害者である娘が、ラストで真実の愛にめざめる、というような設定らしい。

実物の風戸栄介を見るのは、これが初めてだった。舞台が遠くてよくわからないが、その年にしては足が長く、びっちりとしたズボンがよく似合っている。

特徴のある風戸の声に聴きいる客席を、栄子は震えるような満足と共に見渡した。

——わたしを見て。中肉中背、美人でもなければ特別醜くもない、平凡な中年女。だけど本当は違うのよ。わたしは特別な女、あなたたちがうっとり見つめている風戸栄介にとって、わたしは特別な女なの——。

芝居がはねた。栄子は洗面所へ寄って顔を直してから、楽屋へとむかった。思ったよりずっと簡単なことだった。廊下を回り、関係者でごったがえす舞台裏から楽屋へと、栄子は誰にも咎められずにたどりつくことができた。

『風戸栄介』と名札の出た部屋の前に、栄子は立った。引き返そう、と思う自分を、もう一人の大胆な自分が引き止める。

わずかな争いの後、大胆なほうが、本来の気弱で引っこみ思案な栄子に勝った。手がドアをノックし、「どうぞ」の声に、今度はノブを回す。

次の瞬間、栄子は風戸栄介と二人っきりでむかい合っていた。舞台衣裳の派手な背広のまま、風戸は鏡にむかっている。ティッシュペーパーでドローンを落としているその姿を、栄子はぼんやりと見ていた。

「はい、なに？」

風戸が不審気に振り向く。思っていたより顔が小さく、小柄な感じだった。

「わたし、西原栄子と申します」

自分の声が震えているのをいまいましく感じながら、栄子は言った。

「あなたの娘です」

風戸はゆっくりと立ち上がり、背広の上着を脱いで椅子の背にかけた。それから全く変わらない表情で栄子のほうを見ると、

「きみ、どこから入ってきたの」と聞いた。

「客席からです」

栄子は答えた。

「ぼくの舞台を観てくれたんですね」

風戸が微笑む。

とたんにスター俳優のカリスマ性が、体全体から匂い立ち、栄子の胸をしめつけた。

「で、きみはぼくの娘になった……いいですねえ、たいていは恋人だって言われるんですがね、父親になるのも悪くない」

「いいえ」

栄子の声は緊張のあまり高くなる。

「ほんとの娘なんです」

「わかってますよ。よくわかってます」

なだめるように、風戸は頷いた。それからチラリとドアのほうを見た。早く誰か来てくれないかな、

という苛立った表情で。

なんのことはない。迷い込んできた狂信的なファンだと思われるのだ。

「違うんです。わたし黒田春美の娘なんです。母は二か月ほど前に死にました。死に際に教えてくれたんです。あなたが実の父親で、わたしの栄子っていう名前は、あなたの名前から一字もらったのだと……」

栄子はひと息に喋った。しかし心の中には、声にならないもつと多くの言葉が、同時に渦巻いていた。

——誤解しないでください。お金とかスキャンダルとか、そういうものが目当てじゃないの。ただ……ただ、あなたに娘だと認めてもらって、何でもいいからやさしく語りかけてほしいだけなんです。しかし風戸から返ってきたのは、迷惑そうな吐息だけだった。

「申し訳ないが、何のことかわかりませんね……誰か呼びましょうか。それとも面倒なことにならないよう、すぐに帰られますか」

「でも、わたし、ただ……」

どう言ったらいいのかわからないまま、栄子は口の中で呟いた。

人を呼ぶためだろう。風戸がドアのほうへ歩み寄っていく。

「帰ります」

栄子は咄嗟にそう言っていた。風戸の脇をすり抜け、廊下を走って劇場の外へ飛び出した。

恥辱と挫折感にうちのめされながら、栄子は歩いた。涙が溢れ、こらえきれずに嗚咽が洩れた。行き交う人々は、そんな栄子を振り向きもしない。

ひどい男だ、と、栄子は風戸栄介を憎悪した。だがそれと同時に、恋とも愛ともつかない強烈なものに自分がとらわれてしまったことに、栄子は気がつかなかった。

＊

栄子の父は屋根職人だった。いい腕を持った職人だったが、六年前、仕事場の屋根から落ちて死んだ。

台風之夜だった。市会議員の家から、雨漏りを今すぐ修理してくれと電話があった。

もう十時をまわっていたし、酒もかなりはいつていた。なのに父は二つ返事で豪雨の中を出かけて行き、二階の屋根から足を踏み外したのだ。

屋根職人だけあって落ちかたはうまいのだが、この時は酔っていた。コンクリートのベランダで頭を打ち、即死だった。

彼は地位や金のある人に対して、ひどく卑屈なところがあった。ブツブツと陰で悪口を言いながらも、面とむかうとお追従を言い、ただ同然でつまらない仕事でもやってしまう。

栄子は、父のそういうところが嫌いだった。

軽蔑していたといってもいい。だから父がその性格ゆえに不慮の死をとげたからといって、腹をたてこそすれ、悲しむ気にはなれなかった。

母も同じ思いだったらしく、葬式の間じゅう涙ひとつ見せなかった。もともとが、あまり愛しあっている夫婦ではなかったから、一人娘の栄子が結婚したあとは、ろくに会話もない夫婦生活だった。